



外部評価報告書

大学の世界展開力強化事業

～COIL 型教育を活用した米国等との大学間交流形成支援～

タイプA (交流推進プログラム)

「米国から鹿児島、そしてアジアへー多極化時代の三極連携プログラム」

国立大学法人 鹿児島大学

令和3年3月

目 次

I. はじめに	1
II. 外部評価結果の公表に際して	3
III. 外部評価委員会の概要	5
IV. 書面評価による項目別評価	6
1. 観点1：取組状況	6
2. 観点2：目標の達成状況	10
V. 「面接評価」及び「合議評価」による項目別評価	13
VI. 総括評価	16
VII. 外部評価関係資料	18
1. 関連要項等	18
2. 外部評価委員会資料一覧	18
2-1. 事前送付資料	18
2-2. 当日配布資料	18

I. はじめに

鹿児島大学は、「米国から鹿児島、そしてアジアへー多極化時代の三極連携プログラム」を構想し、平成30年度「大学の世界展開力強化事業～COIL型教育を活用した米国等との大学間交流形成支援～タイプA（交流推進プログラム）」に採択されました。

同事業は、オンライン国際協働学習(Collaborative Online International Learning, COIL)等によって、世界的な課題や地域社会の持続可能な発展に取り組むとともに、鹿児島の魅力を発信して特に米国との双方向交流を増加することを目的としています。

令和2年度は、同事業開始後3年目を迎えるにあたり、現段階までの取り組み、進捗状況を確認し、さらなる質の向上を図るため、学外有識者による評価を実施し、その意見を今後の教育研究活動に反映させ、同事業実施の参考とすることにしました。

今回の外部評価の特徴は、国内の高等教育機関から国際交流事業に長けた外国人教員及び日本人教員の他、地方自治体や地域企業から幅広い分野の学外有識者で委員会を構成することで、多面的な意見を求めたことです。これにより同事業の優れた点とともに改善すべき諸課題についてもご指摘いただきました。

今般の新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、当初計画していた学生の派遣・受入事業の実施が困難な状況ではありますが、本学では、この評価結果を貴重な意見として、今後の事業運営に反映させるとともに、事業期間終了後も魅力的な教育プログラムの開発を継続し、グローバル教育の更なる充実、グローバル人材の育成、さらには、地域社会の持続可能な発展に全学一丸となって寄与していく所存でございます。

最後になりましたが、委員長を務めていただきました茨城大学の安 龍洙教授をはじめとする外部評価委員の皆様には、ご多忙の中、本学のためにご尽力を賜り心から御礼申し上げます。

令和3年3月

国立大学法人鹿児島大学

理事・副学長（研究・国際担当）

馬場 昌範

Ⅱ. 外部評価結果の公表に際して

外部評価委員会委員長
安 龍 洙

平成 30 年度より鹿児島大学が実施している「大学の世界展開力強化事業～COIL 型教育を活用した米国等との大学間交流形成支援～タイプ A（交流推進プログラム）」の「米国から鹿児島、そしてアジアへー多極化時代の三極連携プログラム」は、令和 2 年度に事業開始後 3 年目を迎えました。鹿児島をアジアの玄関口として、オンライン国際協働学習（Collaborative Online International Learning = COIL）等によって、鹿児島大学を中心に、米国の大学とアジア諸国の大学をつなぎ、鹿児島の自然環境や地域社会をフィールドに、地理的最端性や文化的境界性を特徴とする同事業は、3 分野 8 コースの課題型リサーチ・プログラムを展開し、事業開始から 2 年間で外国人学生 126 名を受け入れ、日本人学生 162 名を派遣し、計画を上回る学生交流の実績を挙げてきました。

しかしながら、令和 2 年 1 月から続く新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、全世界的な海外渡航制限が行われ、従来の国際的な学生交流が停滞し、同事業の学生交流にも影響を与えています。未だその先行きを見通すことができない状況にある一方で、鹿児島大学の COIL を活用した取り組みは、ポスト・コロナにおける新たな国際交流に向けた挑戦を続けており、デジタル技術を活用した新しい形態の学修の有用性を再認識するものとなりました。

コロナ禍が終息していない現状において、ポスト・コロナを見据えた新たな国際戦略の策定は極めて重要です。このような状況の中、鹿児島大学の取り組みが、コロナ禍における新しい国際的な学生交流の契機として、広く認知・評価されるとともに、ひいては日本と米国・アジア諸国との平和的友好関係が持続的に構築されることを切に願っています。

Ⅲ. 外部評価委員会の概要

評価は、大学から示された令和2年度 鹿児島大学 大学の世界展開力強化事業外部評価委員会資料をもとに、事業開始から令和元年度末までの取組状況や目標の達成状況等の9つの評価項目について、「書面評価」を行った。また、令和2年12月25日に「第1回 鹿児島大学 大学の世界展開力強化事業外部評価委員会」を開催し、大学の世界展開力強化事業プログラム担当教員から構想概要、取組及び達成状況等について説明があり、「面接評価」及び「合議評価」を行った。これらの評価を踏まえ、外部評価委員4名から意見を求め、それをもとに「総括評価」とした。

【第1回 鹿児島大学 大学の世界展開力強化事業外部評価委員会 開催概要】

○日時：令和2年12月25日（金）14：00～16：00

○開催方法：オンライン形式（Zoom）

○出席者：

＜外部評価委員会委員（敬称略）＞

◎安 龍洙（茨城大学 全学教育機構国際教育部門・教授）

・岩崎 貴光（鹿児島商工会議所・議員）

・中菌 正人（鹿児島市国際交流財団・理事長）

・中村 真子（九州大学 農学研究院・准教授）

（◎は委員長）

＜鹿児島大学＞

・理事・副学長（研究・国際担当）

・グローバルセンター長

・グローバルセンター教員

・鹿児島大学 大学の世界展開力強化事業プログラム担当教員

・鹿児島大学学生部国際事業課職員

- 次第：
1. 開会 挨拶：鹿児島大学理事・副学長（研究・国際担当）
 2. 出席者紹介：外部評価委員会委員、鹿児島大学
 3. 配付資料確認：鹿児島大学学生部国際事業課長
 4. 外部評価委員会設置要項に基づき委員長の指名
 5. 外部評価実施要項決定
 6. 構想概要等説明、質疑応答
 7. 取組及び達成状況説明
 8. 全体に関する質疑応答、意見交換
 9. 評価にかかる合議（書面審査と面接審査の総合評価）
 10. 委員長による講評
 11. 閉会 挨拶：鹿児島大学理事・副学長（研究・国際担当）

IV. 書面評価による項目別評価

1. 観点1：取組状況

1-1. 交流プログラムの内容

【評価結果】

評 定	
S (5点) : 2名	構想の実現にあたり、優れた取組が行われている。
A (4点) : 2名	構想の実現にあたり、十分な取組が行われている。
B (3点) : 0名	構想の実現にあたり、取組がやや不十分であり一部改善を要する。
C (2点) : 0名	構想の実現にあたり、取組が不十分であり改善を要する。
D (1点) : 0名	構想の実現にあたり、取組が極めて不十分であり抜本的改善を要する。

【外部評価委員からのコメント】

- 本交流プログラムは、当初の事業計画通り COIL 型教育の特徴を活かした国際的・協働的な教育活動を推進しており、単位相互認定、成績管理なども適切に行われ、質の保証を伴った双方向の交流が行われていると考える。現在、COVID-19 の影響により派遣・受入が困難な状況であるが、代替案の策定を進めているため、事業の推進に問題はないと考える。
- 資料では、より具体的なインターンシップでの活動内容が読み取れないが、JCCNC との連携など、受入れ先の確保などに努めた事は素晴らしいと思う。ただ、受入先企業が海外の日系企業に偏っているならば海外資本企業でのインターンシップの機会を与えたらよりいい機会になると感じる。また、COIL 科目をお互いに相談しながらコース設定をされたのは素晴らしいが、より専門性を持った互いの大学が得意としている講義などを一貫して受けることで、より深い交流とその分野での知識や互いの考え方を共有できると感じる。
- 事前事後の COIL による質の向上、インターンシップの拡充、資格認定等の取組は優れている。
- 2年という短期間で申請時の事業計画をほぼ網羅できており、全学体制で取り組んでいることが明らかである。

1-2. 質の保証を伴った魅力的な大学間交流の枠組み形成

【評価結果】

評 定	
S (5点) : 3名	構想の実現にあたり、優れた取組が行われている。
A (4点) : 1名	構想の実現にあたり、十分な取組が行われている。
B (3点) : 0名	構想の実現にあたり、取組がやや不十分であり一部改善を要する。
C (2点) : 0名	構想の実現にあたり、取組が不十分であり改善を要する。

D (1点) : 0名	構想の実現にあたり、取組が極めて不十分であり抜本的改善を要する。
-------------	----------------------------------

【外部評価委員からのコメント】

- 現在、15校の海外連携校と協定の締結、若しくは締結合意が行われ、学修過程と出口管理の厳格化に努めている。新規採用の外国人教員及び英語等による教育経験を有する日本人教員が海外広報及び COIL 実施に携わっており、質の高い教育が提供できる体制が整っていると判断される。
- ヒト型の組織体制を組むことにより、自由度が高いアプローチが組める事は魅力的だと感じた。今後の課題点などを柔軟に取り組む上では重要であると思われる。
- 学術交流協定の増、COIL の環境整備、教員の増等の取組みは優れている。
- それぞれのプログラムには鹿児島大学側の代表教員と海外連携校の教員がたてられており、プログラム内容にも質保証が確保されていると考えられる。

1-3. 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

【評価結果】

評 定	
S (5点) : 2名	構想の実現にあたり、優れた取組が行われている。
A (4点) : 2名	構想の実現にあたり、十分な取組が行われている。
B (3点) : 0名	構想の実現にあたり、取組がやや不十分であり一部改善を要する。
C (2点) : 0名	構想の実現にあたり、取組が不十分であり改善を要する。
D (1点) : 0名	構想の実現にあたり、取組が極めて不十分であり抜本的改善を要する。

【外部評価委員からのコメント】

- 新規採用した特任教員・専門員による英語での情報提供及びサポート体制、派遣前・留学中・帰国後の修学支援及びリスクマネジメント体制が構築されているため、参加学生が安心して修学に専念できる環境が整っていると判断される。また、地元企業と連携し企業・学生双方に人材発掘・就職先選択肢となる情報を提供する機会を設けており、産学連携の推進にも取り組んでいる。
- 外国人学生へのサポート体制に関して、特任専門員の配置などを行い英語でのサポート体制を築いたことは素晴らしいと感じる。ただ現状は短期での滞在に関するフォローだけなので、今後は長期また受入数を増やすつもりならば、その地域での情報弱者にならないよう（その地域で暮らす上での情報プラットフォームの整備）な整備も必要かと思われる。
- インターンシップに関しては、企業見学や意見交換も大事であるが、就労体験を軸とした長期的なインターンシップなどがあるとより関心と興味が広がるかと思われる。また企業側にとっても多様な価値観を享受できる側面もあり、メリットもあるかと思われる。

- 特任専門員の配置、企業との連携、学生への情報提供体制の強化等の取組は優れている。
- コロナ禍での学生派遣、受け入れのあり方について鹿児島大学だけではなく全大学で検討が必要である。

1-4. 事業実施に伴う大学の国際化と情報の公開、成果の普及

【評価結果】

評 定	
S (5点) : 0名	構想の実現にあたり、優れた取組が行われている。
A (4点) : 4名	構想の実現にあたり、十分な取組が行われている。
B (3点) : 0名	構想の実現にあたり、取組がやや不十分であり一部改善を要する。
C (2点) : 0名	構想の実現にあたり、取組が不十分であり改善を要する。
D (1点) : 0名	構想の実現にあたり、取組が極めて不十分であり抜本的改善を要する。

【外部評価委員からのコメント】

- プログラムの成果についてホームページ、SNS などを通して英語による情報発信を積極的に行っている。また、キックオフ・シンポジウム、国際学生会議による参加者同士の情報共有・意思疎通の強化、学会発表、論文発表などによる国内外への教育情報の発信が行われている。今後、日本語による国内向け情報発信にも力を入れる必要があると考える。
- COVID-19 により、普及活動に関しては限界がある中での最大限の取り組みはされているかと思われる。
- 連携校の増、SNS 等の活用、国際学生会議等の取組は十分である。
- 事業紹介ページは明確で豊富なプログラムが示されている。鹿児島大学ホームページのトップページからのリンクがあればもっとアピールできるのではないか。

1-5. 事業計画の実現性、事業の発展性（補助期間終了後の継続性を含む）、交流プログラムの質の向上のための評価体制

【評価結果】

評 定	
S (5点) : 2名	構想の実現にあたり、優れた取組が行われている。
A (4点) : 2名	構想の実現にあたり、十分な取組が行われている。
B (3点) : 0名	構想の実現にあたり、取組がやや不十分であり一部改善を要する。
C (2点) : 0名	構想の実現にあたり、取組が不十分であり改善を要する。
D (1点) : 0名	構想の実現にあたり、取組が極めて不十分であり抜本的改善を要する。

【外部評価委員からのコメント】

- 初年度に学内委員会を設置し、事業の計画、運営、予算等、実施に関する情報を共有し

ている。ホスト校・連携校双方の担当教員に対するアンケート調査、鹿児島大学の参加学生を対象にしたアンケート調査及び報告書によりプログラムに対する評価や改善が図られている。また、参加校の拡大や海外の大学とのダブルディグリーの締結の予定など、具体的な成果が現れつつある。さらに、シラバスや授業の英語化、インターンシップなどを通じた地域社会の国際化への貢献、修士課程授業の開設による学際的な研究基盤の構築なども事業の大きな成果の一つであるとする。学長裁量経費、寄附金など大学独自の予算も順調に獲得しており、補助期間終了後に事業が継続的に進められることが見込まれる。

- 実施内容に対して、担当教員また学生に報告を課して改善に充てている点などは評価できる。また資金計画などに関しては、進取の精神などの支援基金を活用する点は評価できるが、今回の事業自体がより鹿児島という地域を伸ばすという長期的な活動であるということが鹿児島の地域企業に対してより周知ができれば、インターンシップなどの企業協力やまた資金的な援助なども期待できると思われる。
- COIL の受講者数、学生の派遣・受入ともに計画を上回っている。学術交流協定締結も進んでいるなど取組は優れている。
- 学生が海外へ行く、留学生が鹿児島大学へ来る、というフェーズの交流は順調に進んでいると言える。次の段階へ向けたステップをとることが期待される。

1-6. 留意事項への対応

【評価結果】

評 定	
S (5点) : 3名	構想の実現にあたり、優れた取組が行われている。
A (4点) : 1名	構想の実現にあたり、十分な取組が行われている。
B (3点) : 0名	構想の実現にあたり、取組がやや不十分であり一部改善を要する。
C (2点) : 0名	構想の実現にあたり、取組が不十分であり改善を要する。
D (1点) : 0名	構想の実現にあたり、取組が極めて不十分であり抜本的改善を要する。

【外部評価委員からのコメント】

- 事業開始後に、米国・フィリピンなどの大学と新たに連携校としての追加申請をしており、特任教員4名、特任専門員2名を雇用しサポート体制を整えている。特に、学長の強いリーダーシップのもとで、事業のマネジメントやガバナンス体制の拡充が進められていると考える。また、参加学生の英語力向上のために、学習目的別のコース設定や学内での受験機会の提供など、適切な教育サポートが行われていると判断される。
- 学内で TOEFL iBT Test ができる環境提供ができたことで、英語力の効果測定ができる事は非常に素晴らしいと感じる。ただ現状、就職目的でのスキルとしての受験数の方が多い印象があるので、1年時など早い時期などでのトライを後押しするなど学生側の理解や周知も必要かと思われる。

- グローバルセンターが核となり全学を包括するような体制を整えている。参加学生の Intensive English プログラムの立ち上げを行い、TOEFL を学内で受験できる体制を整備している。

2. 観点2：目標の達成状況

2-1. 中間評価までの達成目標

【評価結果】

評 定	
S (5点) : 4名	全体として目標を上回っており、優れた実績を挙げている。
A (4点) : 0名	全体として目標を達成しており、順調な実績を挙げている。
B (3点) : 0名	全体として目標をやや下回っており、一部改善を要する。
C (2点) : 0名	全体として目標を下回っており、改善を要する。
D (1点) : 0名	全体として目標を大幅に下回っており、抜本的改善を要する。

【外部評価委員からのコメント】

- 一部目標を下回る数値もあるが目標を上回る成果を上げた項目もあり、概ね目標通り事業が進められていると判断される。特に、事業開始後に外国人留学生数が順調に伸び、第3期中期目標を2年残して達成したことは高く評価できる。また、体験型（初級）、自立型（中級）、課題解決型（上級）ともに、様々な活動を通してグローバル人材としての成長が認められる。しかし、評価基準及び国際標準のシラバスの確立、COVID-19の影響による派遣・受入の中止についての対策が求められる。
- 学生のレベルに応じて、段階的にコース設定を行うなど様々な工夫をして、計画に対しての実績も順調に推移していると思われる。短期的にみると、対面での交流授業がCOVID-19により恐らくできなくなることを考慮すると COIL 科目をより魅力ある内容にすることが今後の課題かと思われる。
- 達成目標へ向けて真摯に事業へ取り組んだ成果が一目瞭然である。大学全体のオールラウンド型の場合、合意形成や部局を超えたやりとり等の問題が考えられるがそれをものともせず鹿児島大学内における強いリーダーシップが事業を成功へ導いているのではないか。

2-2. 本事業計画において海外に留学する日本人学生数の推移

【評価結果】

評 定	
S (5点) : 4名	全体として目標を上回っており、優れた実績を挙げている。
A (4点) : 0名	全体として目標を達成しており、順調な実績を挙げている。
B (3点) : 0名	全体として目標をやや下回っており、一部改善を要する。
C (2点) : 0名	全体として目標を下回っており、改善を要する。

D (1点) : 0名	全体として目標を大幅に下回っており、抜本的改善を要する。
-------------	------------------------------

【外部評価委員からのコメント】

- 派遣人数において目標値以上の成果を上げ、派遣プログラムの質的向上にも努めているため、高く評価できる。
- 順調に推移していると思われる。これからも学生に貴重な機会を与えることで益々増えていくと期待している。
- 学生の渡航人数、英語スコアの向上ともに申し分なく目標を大きく上回っている。
- COVID-19 の状況にもよると思うが、単位を伴う3ヶ月以上の留学（米国ノースダコダ大学、中国湖南農業大学）が実現すれば理想的であるといえる。

2-3. 本事業計画において受け入れる外国人学生数の推移

【評価結果】

評 定	
S (5点) : 4名	全体として目標を上回っており、優れた実績を挙げている。
A (4点) : 0名	全体として目標を達成しており、順調な実績を挙げている。
B (3点) : 0名	全体として目標をやや下回っており、一部改善を要する。
C (2点) : 0名	全体として目標を下回っており、改善を要する。
D (1点) : 0名	全体として目標を大幅に下回っており、抜本的改善を要する。

【外部評価委員からのコメント】

- 事業開始後2年間、本事業による受け入れ外国人学生数の目標を達成しており、高く評価できる。今後、オンライン協働学習（COIL）や学生の派遣・受入を円滑に行うためには、シラバスのより一層の充実が求められる。
- 順調に推移していると思われる。体験要素も重要だが、何か実習要素も含めた経験をさせることも良いかと思われる。
- 受け入れ留学生数も目標人数を大きく上回っており、事業のゴールに向けて前進している。
- 特に、プログラムを行っている連携大学からの留学生が多いのであれば、留学生が帰国後に派遣プログラムにTAのような形で参加してもらい、日本人学生滞在時に現地学生との交流も目指すことはできないか。

【外部評価委員からの総合コメント】

- COVID-19 による目標未達成・不達成への対応、計画案の変更、代替案の策定などについてJSPSに確認しながら、早期に検討したほうが良いと思う。
- 個々のコースに鹿児島県の物理的最端性及び文化的境界性が具体的にどのように盛り込まれ、活かされているのかについて、少なくとも年に1回は点検・評価する必要がある。

と思う。

- 教育制度の国際標準化については、国内の大学の先進的事例も参考にしながら進めたほうが良いと思う。
- 日本国内の COIL 型教育手法の普及のために、本事業の成果についてホームページや報告書のみならず、論文発表や学会発表をより積極的に行ったほうが良いと思う。
- 参加学生の同窓会を設立し、中長期的な視野に立って、本事業が学生のキャリア形成と鹿児島県地域グローバル人材育成にどのように貢献しているのかについて、点検・評価する必要があると考える。
- 本事業は地域や大学の国際化に資するところが大きいと、補助期間終了後も継続的に事業が実施されることが期待される。そのためには、特任教員・専門員の継続雇用及び参加学生へ経済的支援が必要になるが、そのための財源確保について検討する必要があると考える。
- COIL 科目での学習や対面での交流などの授業など工夫をされて積極的な事業活動をしていると思う。この事業を行い、持続的に目標を達成するためには、より双方の学生にとって満足度が高い内容として質的向上を意識されると思われる。
- 短期型のプログラムに偏りがちだが、中長期型のプログラムで連携大学先の専門性も高い内容を実習する機会も一定の学生にとってのニーズもあるかと思われる。
- COVID-19 の影響により派遣・受入の困難性が増す中で、事業の実効性を確保するための取組と関係国の状況を的確に把握し、派遣・受入の再会を検討する必要があると思う。
- プログラムに参加した鹿児島大学の学生が、その経験や語学力を活かして地域の活動等に参加していければ、地域貢献になり、当該事業の成果普及やさらなる発展につながるものと思われる。
- 現在は、鹿児島大学内で科目をたて、単位認定しているが、将来は相手先大学から単位を付与されるような科目を立ち上げれば、学生が卒業する際に、より明確な形で留学したことが明らかとなり、また、学生の帰国後の履修負担も軽減できるのではないかと。
- 事業終了と同時にプログラムを終わらせないためにも、中間評価後はどのように本事業を大学内に残していくかが検討課題となるのではないかと。ある特定の時期に在学していた学生のみ享受できた派遣プログラムとならないように、今後を検討する WG 等を発足させ、学内予算の確保等を開始しても良い時期ではないかと。

V. 「面接評価」及び「合議評価」による項目別評価

1. 観点1：取組状況

1-1. 交流プログラムの内容

評価項目①「交流プログラムの内容」については、現時点では、コロナ禍による直接的な交流プログラムの停滞があるものの、評価期間においては、交流プログラムが計画的に行われ、構想の実現にあたり、優れた取組が行われていると判断し、協議の結果、合議評価は「S（構想の実現にあたり、優れた取組が行われている。）」とする。

1-2. 質の保証を伴った魅力的な大学間交流の枠組み形成

評価項目②「質の保証を伴った魅力的な大学間交流の枠組み形成」については、各プログラムの双方大学で担当教員が立てられ質の高い教育が提供できる体制が整っていること、また、海外連携大学との協定締結または締結合意が行われ、学修過程と出口管理の厳格化に努めていることから、構想の実現にあたり、優れた取組が行われていると判断し、協議の結果、合議評価は「S（構想の実現にあたり、優れた取組が行われている。）」とする。

1-3. 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

評価項目③「外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備」については、外国人学生を対象とした就労体験を軸とした長期的なインターンシップの検討など改善していく項目はあるものの、企業との連携推進に努めているとともに、学生へのサポートが円滑及び適切になされるよう、特任専門員の配置によるサポート体制を築き、外国人学生及び日本人学生が修学に専念できる環境整備が整っていることから、構想の実現にあたり、優れた取組が行われていると判断し、協議の結果、合議評価は「S（構想の実現にあたり、優れた取組が行われている。）」とする。

1-4. 事業実施に伴う大学間の国際化と情報の公開、成果の普及

評価項目④「事業実施に伴う大学間の国際化と情報の公開、成果の普及」については、プログラムの成果をホームページやSNSなどを通して英語による情報発信を積極的に行うとともに、キックオフ・シンポジウムや国際学生会議等の場を設けて、学内関係者のみならず他大学や産業界等への普及が行われている一方、一部で限定的な情報発信となっているため、広い情報発信の工夫が必要であることから、構想の実現にあたり、十分な取組が行われていると判断し、協議の結果、合議評価は「A（構想の実現にあたり、十分な取組が行われている。）」とする。

【外部評価委員からの意見（提言）】

- 成果還元は、プログラムに参加した場所、機関だけではなく、地域社会全般に広く公開することが効果的だと考える。併せて、参加学生がプログラムを知った主な情報媒体が明確になれば、参加学生数をさらに増やせるのではないかと。

1-5. 事業計画の実現性、事業の発展性（補助期間終了後の継続性を含む）、交流プログラムの質の向上のための評価体制

評価項目⑤「事業計画の実現性、事業の発展性（補助期間終了後の継続性を含む）、交流プログラムの質の向上のための評価体制」については、補助期間終了後も継続的かつ発展的に質の保証を伴った事業が実施されるよう、将来を見据えた事業計画の作成、運営資金等の確保について検討する必要があるものの、評価期間においては、初年度に学内委員会を設置し、事業の計画、運営、予算等、実施に関する情報共有が行われているほか、海外大学とのダブル・ディグリープログラム協定の締結予定など国際的な教育環境の構築が行われており、取組は順調に進んでいることから、構想の実現にあたり、優れた取組が行われていると判断し、協議の結果、合議評価は「S（構想の実現にあたり、優れた取組が行われている。）」とする。

【外部評価委員からの意見（提言）】

- 鹿児島県の地域企業に対してより周知ができれば、インターンシップなどの企業協力や資金的な援助もあり得る。

1-6. 留意事項への対応

評価項目⑥「留意事項への対応」については、参加学生の英語力を一層向上させるため、効果的な動機付けと併せた大学の支援が十分に成されることを期待するが、多様な連携を支え得るマネジメントやガバナンスについて、運営委員会の設置や学長の強いリーダーシップの下、運営委員会の設置事業のマネジメントやガバナンス体制の拡充が進められていることから、構想の実現にあたり、優れた取組が行われていると判断し、協議の結果、合議評価は「S（構想の実現にあたり、優れた取組が行われている。）」とする。

【外部評価委員からの意見（提言）】

- プログラム終了後も、学生が帰国後、大学内で受講できるようなアドバンストの英語科目の提供やプログラム参加後の追跡調査を行うことが望ましい。

2. 観点2：目標の達成状況

2-1. 中間評価までの達成目標

評価項目⑩「中間評価までの達成目標」については、中間評価までの達成目標に対し、概ね目標どおり順調に達成し、全体として目標を上回っており、優れた実績を挙げていることから、構想の実現にあたり、優れた取組が行われていると判断し、協議の結果、合議評価は「S（全体として目標を上回っており、優れた実績を挙げている。）」とする。

2-2. 本事業計画において海外に留学する日本人学生数の推移

2-3. 本事業計画において受け入れる外国人学生数の推移

評価項目⑪「本事業計画において海外に留学する日本人学生数の推移」及び評価項目⑫「本事業計画において受け入れる外国人学生数の推移」については、全体として目標を上回っており、優れた実績を挙げていることから、構想の実現にあたり、優れた取組が行われていると判断し、協議の結果、総合評価は「S（全体として目標を上回っており、優れた実績を挙げている。）」とする。

VI. 総括評価

事業名「米国から鹿児島、そしてアジアへー多極化時代の三極連携プログラム」について、委員4名による書面評価及び面接評価に基づき、以下のように総括評価を行った。

- 交流プログラムの内容については、当事業はオンライン国際協働学習（COIL）の特徴を活かした充実した教育活動が行われていると判断される。また、教育の質的向上、受け入れ先の確保、インターンシップの拡充、資格認定等に積極的に取り組んでおり、事業開始後2年間で申請時の事業計画がほぼ網羅して実施されている。
- 質の保証を伴った魅力的な大学間交流の枠組み形成については、現在、15校の海外連携校と協定の締結、若しくは締結合意が行われ、ヒトデ型の組織体制による自由度の高いアプローチをしている。また、プログラム内容の質保証が確保されており、特任教員・専門員の配置により、英語でのサポート体制を構築し、企業との連携、学生への情報提供体制の強化に努めている。しかし、コロナ禍での学生派遣、受入のあり方について連携校と協議しながら取り組む必要がある。
- 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備については、新規採用した特任教員・専門員による英語での情報提供及びサポート体制、派遣前・留学中・帰国後の修学支援及びリスクマネジメント体制が構築されているため、参加学生が安心して修学に専念できる環境が整っていると判断される。また、地元企業と連携し企業・学生双方に人材発掘・就職先選択肢となる情報を提供する機会を設けており、産学連携の推進にも積極的に取り組んでいる。今後、就労体験を軸とした長期的なインターンシップの実施、コロナ禍での学生派遣、受入のあり方について鹿児島大学・連携大学双方の検討が必要であると考えます。
- 事業実施に伴う大学の国際化と情報の公開、成果の普及については、大学のホームページに明確で豊富なプログラムが示されており、英語による情報発信なども積極的に行っている。また、学会発表、論文発表などによる国内外への教育情報の発信にも力を入れている。COVID-19により普及活動の限界がある中で最大限の措置を講じているが、鹿児島大学ホームページのトップページからのリンクを張るなど改善の余地があると考えます。
- 事業計画の実現性、事業の発展性（補助期間終了後の継続性を含む）、交流プログラムの質の向上のための評価体制については、外国人学生受入及び日本人学生派遣の環境整備のために、学内委員会を設置し、事業の計画、運営、予算等、実施に関する情報を共有している。また、担当教員及び参加学生に対するアンケート調査、報告書作成によりプログラムに対する評価と改善が図られている。さらに、参加校の拡大や海外大学と

のダブルディグリーの締結予定など、事業の具体的な成果が現れている。大学独自の予算獲得も順調に行われており、補助金終了後の事業継続が見込まれる。また、鹿児島県の地域企業に対してより積極的に周知活動を行うことにより、インターンシップの企業協力の拡大や資金援助が得られる可能性があると思われる。

- 留意事項への対応については、グローバルセンターが核となり全学を包括するような体制を整えており、学長の強いリーダーシップのもとで、事業のマネジメントやガバナンス体制の拡充が進められている。また、参加学生の英語力向上のために、学習目的別のコース設定や学内での受験機会の提供など、適切な教育サポートが行われている。
- 中間評価までの達成目標については、学生のレベルに応じたコース設定を行い、達成目標へ向けて真摯に事業へ取り組み、事業開始後に外国人学生数が目標以上に伸びるなど、目標値を上回る実績を上げている。しかし、現下の COVID-19 の影響による派遣・受入の中止についての対策が、今後一層強く求められる。
- 「本事業計画において海外に留学する日本人学生数の推移」及び「本事業計画において受け入れる外国人学生数の推移」については、鹿児島大学学生の派遣人数、外国人学生の受入人数ともに目標値以上の成果を上げ、プログラムの質的向上にも努めている。今後、オンライン国際協働学習（COIL）や学生の派遣・受入を円滑に行うためには、シラバスのより一層の充実が求められる。

以上の理由により、外部評価委員会が全会一致で本事業に対して「優れた取組状況であり、事業目的の達成が見込まれる（S評価）」と評価した。

総括評価	
S	優れた取組状況であり、事業目的の達成が見込まれる。
A	これまでの取組を継続することによって、事業目的を達成することが可能と判断される。
A-	これまでの取組を一部改善することによって、事業目的を達成することが可能と判断される。
B	当初の目的を達成するには、助言等を考慮し、より一層の改善と努力が必要と判断される。
C	これまでの取組状況等に鑑み、目的の達成が困難な取組があると考えられ、成果を見込めない取組については縮小・廃止し、財政支援規模の縮小が妥当と判断される。
D	これまでの取組状況等に鑑み、事業目的の達成は著しく困難と考えられ、財政支援の中止が妥当と判断される。

Ⅶ 外部評価関係資料

1. 関連要項等

1. 鹿児島大学「大学の世界展開力強化事業」外部評価委員会設置要項
2. 令和2年度 鹿児島大学 大学の世界展開力強化事業 外部評価実施要項
3. 令和2年度 鹿児島大学 大学の世界展開力強化事業外部評価委員会評価方法について
4. 鹿児島大学 大学の世界展開力強化事業 外部評価委員用評価書（書面評価）評価の手引き

2. 外部評価委員会資料一覧

2-1. 事前送付資料

- (1) 次第
- (2) 鹿児島大学「大学の世界展開力強化事業」外部評価委員会設置要項
- (3) 令和2年度鹿児島大学「大学の世界展開力強化事業」外部評価実施要項（案）
- (4) 令和2年度鹿児島大学「大学の世界展開力強化事業」外部評価委員会評価方法について
- (5) 鹿児島大学「大学の世界展開力強化事業」外部評価委員用評価書（書面評価）
評価の手引き
- (6) 資料1. 鹿児島大学「大学の世界展開力強化事業」外部評価委員用評価書（書面評価）
- (7) 資料2. 大学の世界展開力強化事業 中間評価調書
- (8) 資料3. 大学の世界展開力強化事業（2018年度選定）鹿児島大学取組概要

2-2. 当日配布資料

- (1) 次第
- (2) 鹿児島大学「大学の世界展開力強化事業」外部評価委員会設置要項
- (3) 令和2年度 鹿児島大学 大学の世界展開力強化事業 外部評価実施要項（案）
- (4) 鹿児島大学 大学の世界展開力協会事業 外部評価委員会 書面評価結果一覧表
- (5) 鹿児島大学 大学の世界展開力強化事業外部評価 総括評価書（合議）

外部評価報告書

大学の世界展開力強化事業

～COIL 型教育を活用した米国等との大学間交流形成支援～
「米国から鹿児島、そしてアジアへー多極化時代の三極連携プログラム」

国立大学法人 鹿児島大学

令和3年3月 発行